はじめに

ＬＧＢＴという言葉を、新聞やテレビで目にする機会がこの一〇年ほどで増えました。教育現場などでも研修のテーマに取り上げられる機会が増え、著者である私も講師の一人として、さまざまな現場に呼ばれる日々を過ごしています。

私は、ＬＧＢＴやそうかもしれない子ども・若者が安心して集まれる居場所づくりに取り組む団体「一般社団法人にじーず」の代表として、たくさんの若年当事者と日々接しています。「にじーず」は二〇一六年に東京で発足し、現在は各地に拠点を展開して活動している団体です。これまで、のべ二〇〇〇人を超える利用があり、多くの子どもたちと出会ってきました。

利用者の中には、学校が楽しい子もいれば、学校がしんどい子もいます。理解ある家族が入り口まで送り迎えしてくれる子もいれば、家の中でも心ない言葉をぶつけられている子もいます。「にじーず」に参加するとき、「どこに行くの」と家族に聞かれても本当のことが言えず、「勉強に行く」と言ってカバンにたくさん教科書を入れて来たりする子どもたちの現状を見ると、やっぱり胸が痛みます。世の中が変わってほしいなぁ、と思う瞬間です。

家族の無理解もつらいですが、「学校が変わってほしい」という声も子どもたちから毎回のように出ます。最も多いリクエストの一つは「先生にまずは勉強してほしい」というものです。相談をしたいと思っても、相手がＬＧＢＴのことを知らない場合にはたくさん説明をしなくてはいけません。すると相談どころではなくなってしまいます。

これは、今では三〇代半ばになった私でも心当たりがある、学生時代にそのように思っていたことの一つです。私が中高生時代を過ごした二〇〇〇年代前半にはＬＧＢＴの概念は日本でほとんど知られておらず、教員研修もまれでした。だから、大人にカミングアウトするときには、勉強会を開催するかのごとく資料を揃えていたものでした（私もトランスジェンダーの当事者です）。

それから二〇年ほど経過した今では、昔とは違い、探せば情報は出てくるようになりました。しかしまだまだ十分とは言えない、あるいは情報が玉石混合とも言える状況があります。インターネットで検索すれば、どれが正しいのかわからない情報であふれています。そんな中では、カミングアウトしようとする子どもだけではなく、カミングアウトを受けた教師もまた悩んだり葛藤したりしている現状があるのではないかと感じています。なんとかしてあげたい、でもどうしたらいいのかわからない。職員室の中でも教師によって温度差があって、どうやって前に進んだらいいのかわからない。そんな悩みを聞くこともあります。

このような状況をかんがみて、子どもたちに寄り添いたいと考えている教師が気軽に読める本がもっと増えたらと思い、本書が誕生しました。

本書は、ＬＧＢＴやそうかもしれない子どもたちが、どうしたら学校で安心してのびのびと過ごすことができるのか、研修を受けたことのない人でもわかりやすいように解説しています。もとは『月刊学校教育相談』（ほんの森出版）に、二〇二〇年四月号から二〇二一年三月号まで連載されていた内容を、書籍として読みやすいかたちで再構成しました。

性の多様性をめぐる用語や概念の解説、取り組みのポイントだけでなく、現場での実際の取り組み事例もインタビューをもとに紹介しています。生徒たちが主体となって学校を変えている実践も紹介しました。単に教師が子どもたちに何かをしてあげるのではなく、子どもたちも一緒になって多様性を尊重する場をつくっていくことを重視した内容になっているかと思います。

多様性を尊重した学校づくりの実践もまた多様であり、一つの答えがあるわけではありません。この本がヒントになり、読者の皆様の日頃の取り組みに少しでも役立てていただけたら幸いです。